

米国



1 農・畜産業の概況

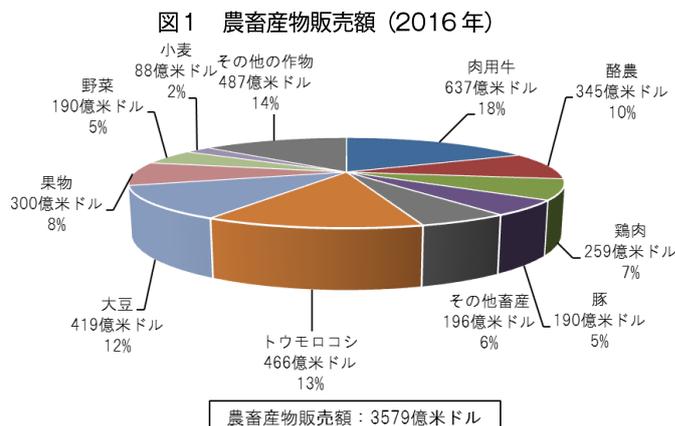
米国経済における農業の位置付けは、他産業の発展に伴い低下傾向にあるが、2016年のGDPに占める農業生産の割合は4.7%(前年比0.1ポイント増)と、前年並みとなった。

2016年の農業経営体数(農畜産物の年間販売額1000米ドル以上)は、前年比0.4%減の206万戸、農用地面積は同0.1%減の9億1100万エーカー(3億6867万ヘクタール)となった。1経営体当たりの農用地面積は、同0.2%増の442エーカー(178ヘクタール)であった。なお、年間10万米ドル以上の農畜産物販売実績のある経営体は全体の19.8%で、全農用地面積の69.5%を占めた。

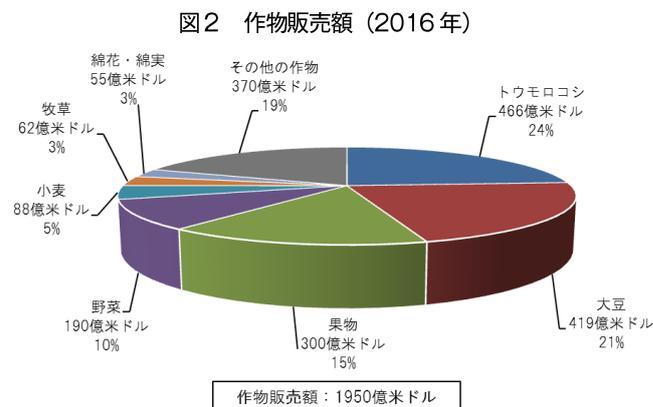
2016年の農畜産物販売額(現金収入。自家消費分を除く)は、3579億米ドルと前年を5.1%下回った(図1)。

部門別に見ると、作物部門は同4.0%増の1950億米ドルとなった。このうち、生産量の約4割が家畜飼料に仕向けられるトウモロコシは、466億米ドル(作物部門に占める割合は23.9%)と最大を占めた。次いで、大豆が419億米ドル(同21.5%)、果物が300億米ドル(同15.4%)、野菜が190億米ドル(同9.7%)となった(図2)。

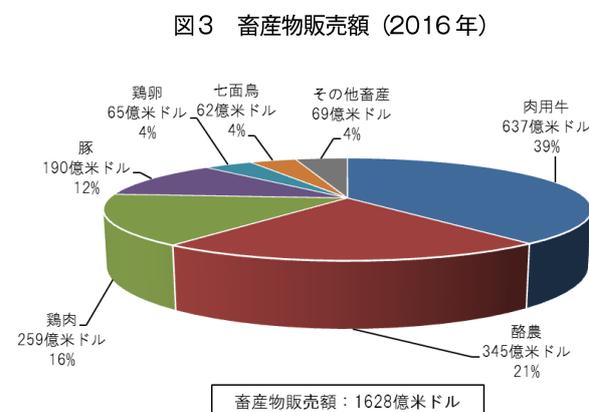
畜産部門は、同14.1%減の1628億米ドル(農畜産物販売額に占める割合は45.5%)となった。この内訳を見ると、肉用牛が637億米ドルと畜産部門のうち39.1%を占めた。次いで、酪農が345億米ドル(畜産部門に占める割合は21.2%)、鶏肉が259億米ドル(同15.9%)、豚が190億米ドル(同11.7%)となった(図3)。



資料：USDA [United States and State Farm Income Data]
注：暫定値。



資料：USDA [United States and State Farm Income Data]
注：暫定値。



資料：USDA [United States and State Farm Income Data]
注：暫定値。

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

米国は、年間 9000 万トンを超える生乳を生産する世界最大級の酪農国である。しかし、国内に巨大な消費市場を抱えていることなどから、国際乳製品市場での米国の位置付けは、さほど高いものとはなっていない。

① 主要な政策

酪農の主な制度には、連邦生乳マーケティング・オーダー制度（FMMO）、酪農マージン保護プログラム（MPP）、乳製品寄贈プログラム（DPDP）がある。

FMMOは、オーダー（生乳取引地域）内で取り引きされる生乳について、飲用向け 1 分類と加工向け 3 分類の計 4 分類の用途別に分け、それぞれの最低取引価格を設定するとともに、生乳取扱業者に対して、生産者へのプール乳価（用途別乳価を加重平均した乳価）支払いを義務付けている。これにより、生産者に対して安定的な収入の確保を可能とするとともに、消費者に対して合理的な価格で牛乳・乳製品を供給することを目的としている。2000 年 1 月からは、①オーダー数の再編統合（当初の 31 地域が段階的に統合され、2004 年 4 月から 10 地域へ）②生乳の用途区分の再分類（3 区分から現行の 4 区分へ）③最低取引価格の設定に当たり、従来の基礎公式価格（BFP）に代えて、多成分価格形成システムに基づく新基礎価格の導入などの変更が加えられた。

MPPは、2014 年農業法で、生乳収入損失補償契約プログラム（MILC）に代わる酪農家のセーフティネットとして創設された制度である。MPPは、補填の指標に飼料費を加味し、乳価と飼料費の差を酪農家の収益（マージン）とし、掛け率に応じて補償することにより、再生産を確保することを目的としている。

また、DPDPも 2014 年農業法で創設された制度である。DPDPは、乳製品価格の間接的な支持を目的に、一定の経済状況下において、米国農務省（USDA）による乳製品の買い上げを実施するとともに、

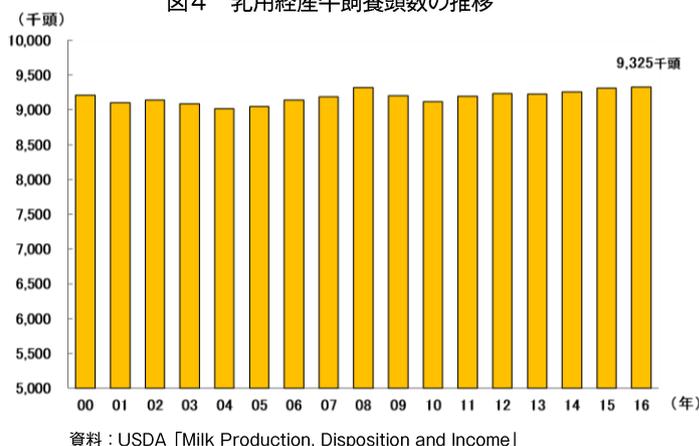
購買した乳製品を寄贈したり、政府のプログラムで使用するよう設計されている。

② 生乳の生産動向

ア 飼養頭数

乳用経産牛飼養頭数は、1980 年代中ごろから一貫して減少傾向で推移してきたが、1999 年に下げ止まった後は、小幅な増減を繰り返している。2016 年の乳用経産牛飼養頭数は、前年比 0.1% 増の 932 万 5000 頭となった（図 4）。

図 4 乳用経産牛飼養頭数の推移



イ 生産量

2016 年の生乳生産量は、乳用経産牛頭数および 1 頭当たり乳量の増加により、9634 万 5000 トン（前年比 1.8% 増）とわずかに増加し、6 年連続で前年を上回った（表 1）。

表 1 生乳・乳製品の生産量

(単位：千トン)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
生乳	91,009	91,276	93,464	94,618	96,345
バター	843	845	842	839	834
脱脂粉乳	800	670	800	827	795
チーズ	4,938	5,036	5,222	5,367	5,525

資料：USDA「Milk Production, Disposition and Income」、[Dairy Products]

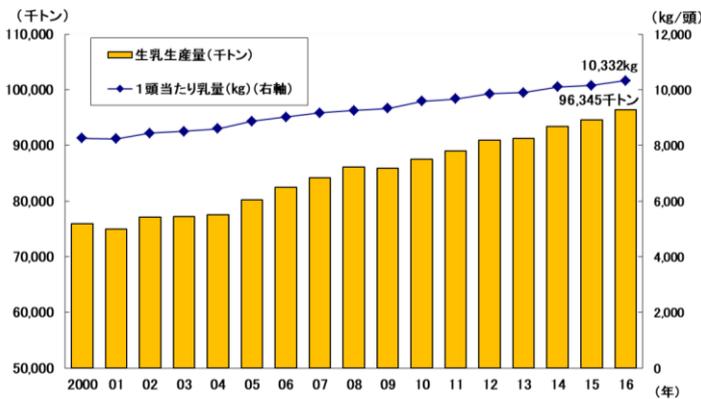
注：チーズはカッテージチーズを除く。

ウ 経産牛 1 頭当たり乳量

経産牛 1 頭当たり乳量は、遺伝的改良などにより増加傾向で推移しており、2016 年は、1 万 332 キログ

ラム（前年比 1.7%増）とわずかに増加した（図 5）。

図5 生乳生産量と1頭当たり乳量の推移



資料：USDA「Milk Production, Disposition and Income」

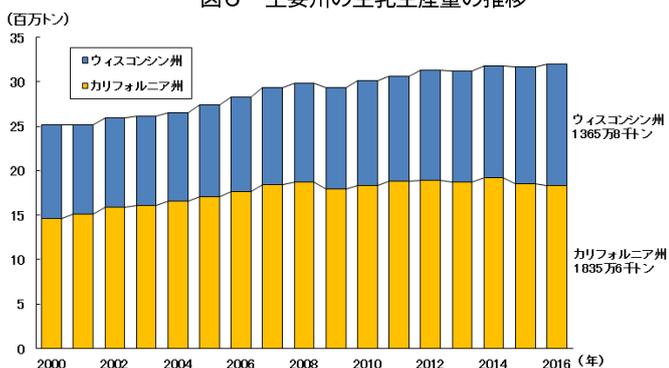
エ 地域別生産動向

生乳生産量の5割強は上位5州（カリフォルニア、ウィスコンシン、アイダホ、ニューヨーク、ペンシルバニア）で占められており、上位10州（上位5州にテキサス、ミシガン、ミネソタ、ニューメキシコ、ワシントンを加える）では、全体の約7割を占めている。

一部の州では、安価な労働力を背景とした大規模化が進んでおり、代表的なカリフォルニア州は、1993年にウィスコンシン州を抜いて国内最大の生乳生産州になって以降も増加基調で推移してきた。

カリフォルニア州については、2009年に、前年終盤の国際乳製品価格の暴落を受けて1792万トン（前年比4.1%減）へ減少した。2010年から2014年までおおむね増加傾向で推移したものの、2015年に干ばつの影響により減少に転じた。2016年は、引き続き干ばつの影響があったことなどから、同1.0%減の1835万6000トンとなった。一方、生乳生産量第2位のウィスコンシン州は、2016年に1365万8000トン（同3.7%増）となった（図6）。

図6 主要州の生乳生産量の推移



資料：USDA「Milk Production, Disposition and Income」



写真1 酪農家での乳牛飼養風景

③ 牛乳・乳製品の需給動向

ア 生産動向

2016年のチーズの生産量（カッテージチーズを除く）は、前年比3.0%増の552万5000トンとなった（図7）。このうち、チェダーチーズを中心とするアメリカンタイプ^(注1)は、216万3000トン（同1.6%増）となり、モッツァレラチーズなどイタリアンタイプ^(注2)は、240万6000トン（同4.4%増）となった。

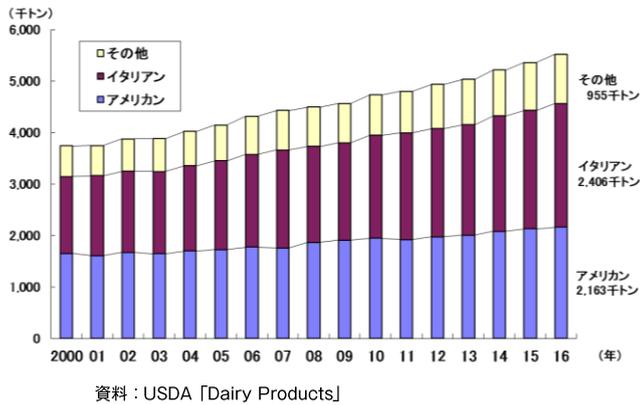
イタリアンタイプは、宅配ピザやファストフードでの需要増により、過去20年以上増加基調で推移している。同年のチーズ生産量に占める割合は、アメリカンタイプが39.1%（前年比0.5ポイント減）、イタリアンタイプが43.5%（同0.6ポイント増）となった。

また、バター生産量は、83万4000トン（前年比0.6%減）となり、脱脂粉乳の生産量は79万5000トン（同3.8%減）といずれも減少した。

（注1）アメリカンタイプには、チェダー、コルビー、モンテレージャックなどを含む。

（注2）イタリアンタイプには、モッツァレラ、パルメザン、プロヴォローネ、リコッタ、ロマーリオなどを含む。

図7 チーズ生産量の推移



イ 消費動向

1人当たり年間飲用乳消費量（製品ベース、以下同じ）は、植物由来の脂肪を利用した飲料との競合などにより、近年減少傾向で推移しており、2016年は69.9キログラム（前年比1.3%減）となった。なお、飲用乳については、乳脂肪が必ずしも体に悪影響を及ぼすものではないとの認識が広まっていることなどから、低脂肪牛乳や無脂肪牛乳など低脂肪タイプの消費量が減少する一方、全脂牛乳（いわゆる普通の牛乳）の消費が伸びている。

1人当たり年間チーズ消費量（カッテージチーズを除く）は、近年、増加傾向で推移しており、2016年は16.5キログラム（前年比3.7%増）となった。また、1人当たり年間バター消費量は、2.6キログラム（同1.6%増）となった。

④ 牛乳乳製品の価格動向

ア 生乳価格

2016年の生乳の生産者販売価格は、国際的な乳製品需給の緩和を受けて100ポンド当たり16.30米ドル（前年比4.7%安）とやや下落した（表2）。

表2 生乳の生産者販売価格
(単位：米ドル/100ポンド)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
生乳平均価格	18.50	20.10	24.00	17.10	16.30

資料：USDA [Agricultural Price]

イ 乳製品の卸売価格

2016年のバターの卸売価格は、1ポンド当たり208.2セント（同0.4%安）と高止まりした（表3）。脱脂粉乳は、供給量の増加により同83.4セント（同8.2%安）とかなり下落した。チェダーチーズは、国内生産量の増加などにより、187.4セント（前年比2.0%安）と下落した。

表3 乳製品の卸売価格の推移
(単位：セント/ポンド)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
バター	160.3	155.6	216.4	208.9	208.2
脱脂粉乳	134.7	170.3	171.5	90.9	83.4
チェダーチーズ	169.8	176.4	240.4	191.1	187.4

資料：USDA [Dairy Market News]

- 注1：バターはシカゴ・マーカンタイル取引所の現物価格（グレードAA）。
- 2：脱脂粉乳は西部のFOB価格。
- 3：チーズはシカゴ・マーカンタイル取引所の現物価格。



写真2 小売店でのチーズの陳列風景

⑤ 乳製品の政府買い上げ

乳製品価格支持プログラム（DPPSP）は2013年9月で廃止されたことから、以後同プログラム下での政府による乳製品の買い上げは実施されていない。

代わりに創設された乳製品寄贈プログラム（DPPD）においても、2016年は、堅調な輸出需要を反映して米国内の乳製品価格が堅調に推移したことから、政府による余剰乳製品の買い上げは6年連続で実施されなかった。

(2) 肉牛・牛肉産業

米国は、世界の牛肉生産量の約2割を占める最大の牛肉生産国であると同時に、世界最大の牛肉輸入国でもある。国内的にも、肉牛産業の農産物販売額に占める割合は最大となっており、米国農業の中で最も重要な部門の一つである。

肉用子牛生産は、家族経営による生産・管理が行われる一方、育成された肥育もと牛に関しては、大規模なフィードロットで効率的な穀物肥育が行われている。また、肉牛の流通面では、大手バツカーによる寡占化が顕著となっている。

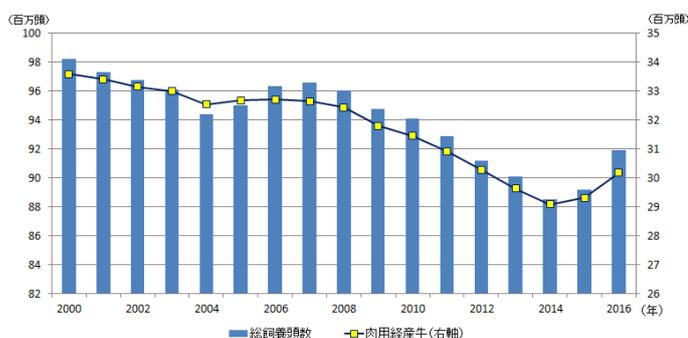
① 肉牛の生産動向

牛飼養頭数は、2006年後半以降の飼料コスト高や2011年以降の干ばつなどにより、肉用牛繁殖経営の収益性が悪化し、肉用繁殖雌牛を中心に淘汰が進んだことから、2014年まで減少傾向で推移してきたが、2015年は、草地の状態が改善されたことによる牛群の再構築の進展により、2007年以来の増加に転じた。2016年は、前年比3.1%増の9191万8000頭と、前年に続き増加した(図8)。

2016年の飼養頭数の内訳を見ると、肉用繁殖雌牛は前年比2.9%増の3016万6000頭となり、500ポンド(約227キログラム)以上の肉用繁殖後継牛は、634万頭(同4.2%増)とやや増加した。草地の状態が改善されたことなどから、繁殖農家の増頭意欲が高まったとみられている。

また、同年の子牛生産頭数(乳用種を含む)は、前年比3.0%増の3509万3000頭となった。

図8 牛飼養頭数の推移



資料：USDA「Cattle」
注：各年1月1日現在。



写真3 フィードロットの風景

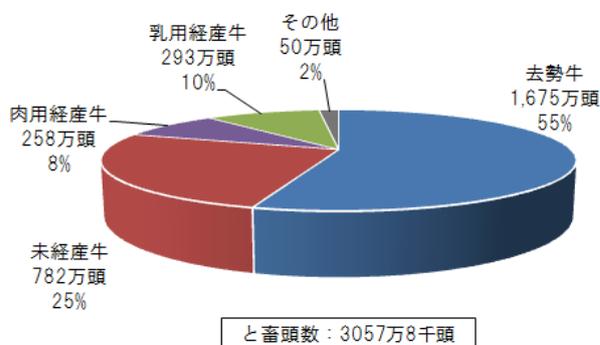
② 牛肉の需給動向

ア 生産動向

2016年の成牛と畜頭数は、前年比6.4%増の3057万8000頭となった。

種類別では、去勢牛は同7.5%増、肉用経産牛は同13.6%増、未経産牛は同4.6%増といずれも増加した。一方、乳用経産牛は同1.1%減となった(図9)。このほか、同年の子牛と畜頭数は、同7.8%増の48万8000頭となった。

図9 種類別と畜頭数(2016年)



資料：USDA「Livestock Slaughter」

一方、2016年の成牛のと畜時平均生体重(連邦政府検査ベース)は、飼料穀物価格安による肥育期間の長期化などを背景に堅調に推移していたものの、下期に飼料穀物価格が上昇したことによりフィードロットからの早期出荷が増えたことから、前年比0.1%増の619キログラムとなった。また、平均枝肉重量(連邦政府検査ベース)は、前年並みの376キログラムとなった。同年の主要7州(アリゾナ、カリフォルニア、コロラド、アイオワ、カンザス、ネブラスカ、テキサス)の肥育もと牛導入頭数は1883万7000頭(同

5.5%増)、また、肥育牛出荷頭数は1823万4000頭(同5.8%増)となった。

こうしたことから、同年の牛肉生産量(枝肉重量ベース)は、前年比6.4%増の1144万トンとなった(表4)。

表4 牛肉需給(枝肉換算)の推移

(単位:千トン)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
生産量	11,754	11,666	11,000	10,749	11,440
輸入量	1,007	1,020	1,337	1,529	1,366
輸出量	1,112	1,174	1,167	1,028	1,160
在庫量	276	265	268	310	343
消費量	11,679	11,556	11,195	11,236	11,643
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	26.0	25.6	24.6	24.5	25.2

資料: USDA [Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Table]

注: 1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出入動向

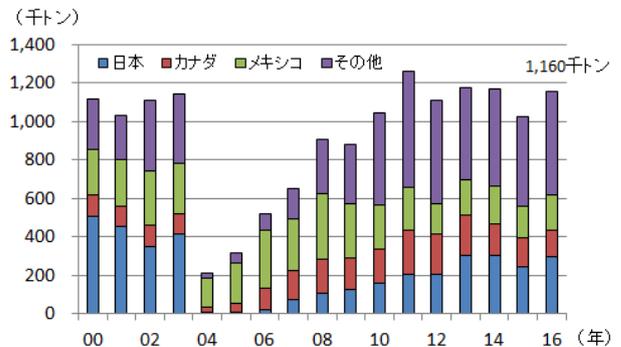
2016年の牛肉輸入量(枝肉重量ベース)は、前年比10.6%減の136万6000トンとかなりの程度減少した。国別に見ると、最大の輸入先の豪州は、干ばつによる飼養環境の悪化から牛の淘汰が進み、飼養頭数が減少したことから、34万8000トン(同39.0%減)と大幅に減少した。また、ニュージーランドも、同7.4%減の27万8000トンと減少した。一方、カナダは、同国も繁殖雌牛飼養頭数の減少傾向が続いていたものの、米国からの強い牛肉需要により、32万6000トン(同14.2%増)とかなり大きく増加した。

同年の生体牛の輸入は、メキシコからが94万3000頭(同18.3%減)となった。カナダからは、同国でも飼養頭数が減少していることなどから、76万5000頭(前年比7.8%減)となった。全体では170万8000頭(同13.9%減)とかなり大きく減少した。

牛肉輸出量は、2003年12月に米国内で初めてBSEが発生した影響を受け、2004年に大幅に減少した。2005年以降は増加傾向で推移し、2011年に過去最高を記録した。2012年以降110万トン台で推移していたが、2015年は、牛肉生産量の減少などにより大きく減少した。2016年は、牛肉生産量の増加に加え、輸出競合国である豪州産の輸出減少により、前年比

12.8%増の116万トンと増加に転じた。国別では、最大の輸出先である日本向けが29万7000トン(同21.5%増)、メキシコ向けは17万9000トン(同8.9%増)と大きく増加に転じた。一方、カナダ向けは14万トン(同4.9%減)となった(図10)。

図10 牛肉の輸出量と相手国の推移



資料: USDA/ERS [Livestock and Meat Trade Data]

ウ 消費動向

1人当たり年間牛肉消費量(小売重量ベース)は、2016年は、前年比2.8%増の25.2キログラムとなった。

③ 肉牛・牛肉の価格動向

ア 肥育もと牛価格

2016年の肥育もと牛価格(オクラホマシティー、600~650ポンド)は、牛群再構築に伴う保留傾向が維持されたものの、飼養頭数の増加に伴いフィードロットへの供給余力が増したことから、前年を下回って推移した。2016年平均では、前年比32.3%安の100ポンド当たり153.4米ドルと大幅に下落した(表5)。

イ 肥育牛価格

2016年の肥育牛価格(ネブラスカ、1100~1300ポンド、去勢牛、チョイス級^(注))は、フィードロット飼養頭数の増加などにより、前年比18.8%安の100ポンド当たり120.7米ドルとなった。

(注) 肉質等級のうち、上から2番目の等級。

ウ 牛肉卸売価格

2016年の卸売価格(チョイス級、600~900ポンド、カットアウトバリュー)は、100ポンド当たり206.7

米ドルと前年比 13.0%安となった。

エ 牛肉小売価格

2016 年の平均牛肉小売価格（チョイス級）は、前年比5.2%安の1ポンド当たり596.3セントとなった。

表5 生体牛と牛肉の価格の推移

(単位:米ドル/100ポンド)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
肥育もと牛	158.2	158.8	225.1	226.5	153.4
肥育牛	123.1	126.2	155.1	148.6	120.7
牛肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	190.7	195.6	239.2	237.5	206.7
牛肉小売価格 (セント/ポンド)	498.6	528.9	597.1	628.9	596.3

資料：USDA [Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook : Table]

注：カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

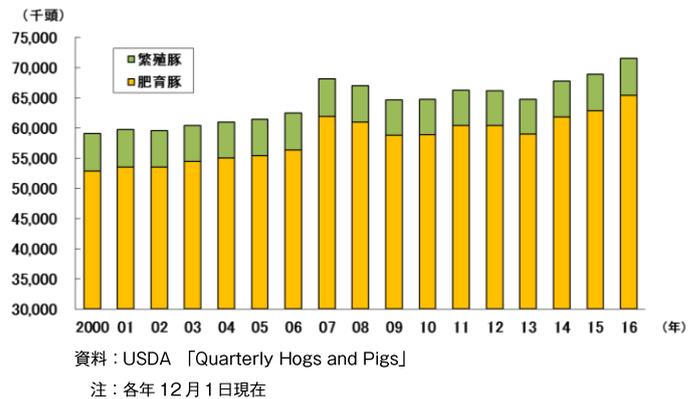
(3) 養豚・豚肉産業

米国の養豚は、アイオワ州やイリノイ州を中心とするコーンベルト地帯で、伝統的に穀物生産や肉牛経営の副業として営まれてきた。一方、ノースカロライナ州やオクラホマ州でのインテグレーションの出現は、養豚産業に対して、生産・流通などの面で大きな変化をもたらした。また、各州で環境規制を強化する動きがみられることから、大規模経営体による環境問題も顕在化している。

① 肉豚の生産動向

豚飼養頭数は、2010 年以降はおおむね増加傾向で推移したものの、2013 年は豚流行性下痢 (PED) の発生により落ち込んだ。しかし、2014 年には再び増加に転じ、2016 年は前年比 3.8%増の 7154 万 5000 頭と、1944 年以降で最高を記録した (図 11)。飼養頭数の内訳を見ると、繁殖豚は 611 万頭 (同 1.8 %増)、肥育豚は 6543 万 5000 頭 (同 4.0%増) となった。

図 11 繁殖豚頭数と肥育豚頭数の推移



2016 年 (2015 年 12 月～2016 年 11 月) の子豚生産頭数は、良好な収益性により繁殖母豚が増加したことに加え、一腹当たり産子数が 10.50 頭 (同 1.2%増) となったことから、1 億 2593 万 9000 頭 (同 3.7 %増) となった。



写真4 肉豚の飼養風景

② 豚肉の需給動向

ア 生産動向

2016 年のと畜頭数 (コマーシャルベース) は、飼養頭数の増加に伴い、1 億 1822 万頭 (前年比 2.4%増) となり、豚肉生産量は 1131 万 3000 トン (同 1.8%増) と過去最高を記録した (表 6)。

一方、2016 年のと畜時平均生体重 (連邦政府検査ベース) は、127.9 キログラム (前年比 0.4%減)、平均枝肉重量 (連邦政府検査ベース) は、95.7 キログラム (同 0.9%減) となった。

表6 豚肉需給（枝肉換算）の推移
(単位:千トン)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
生産量	10,547	10,517	10,361	11,114	11,313
輸入量	364	399	459	506	495
輸出量	2,440	2,262	2,310	2,272	2,376
在庫量	283	280	253	267	230
消費量	8,440	8,665	8,544	9,340	9,476
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	20.8	21.2	20.8	22.6	22.7

資料：USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」

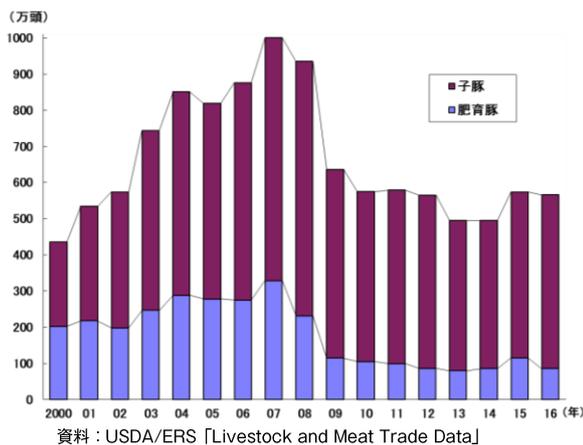
注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出入動向

2016年の豚肉の輸入量（枝肉重量ベース）は、豚肉生産量の増加により、49万5000トン（前年比2.2%減）となった。国別に見ると、最大の輸入先であるカナダが35万7000トン（同7.8%減（総輸入量に占める割合は72.2%））、デンマークは3万トン（同8.6%減（同6.1%））と減少した。

同年の生体豚の輸入は、ほぼ100%がカナダからである。同国からの輸入頭数は、米国内の豚飼養頭数の増加により、565万7000頭（前年比1.5%減）となった（図12）。

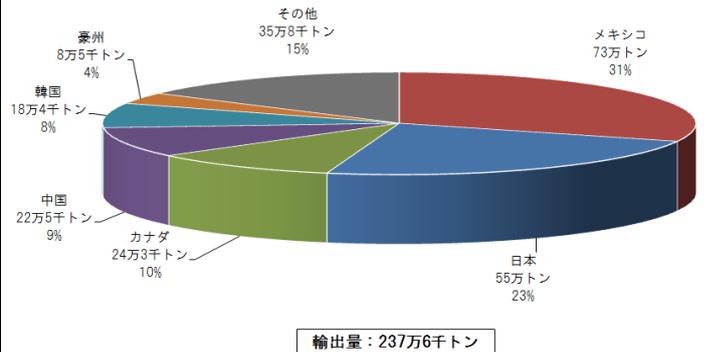
図12 カナダからの生体豚輸入頭数の推移



輸出量（枝肉重量ベース）は、2013年にPEDによる減産で減少し、2014年には増加に転じたが、2015年には、主要通貨に対して米ドル高で推移した為替相場などから再び減少した。2016年は、前年比4.6%増の237万6000トンとなった。国・地域別に見ると、

メキシコ向けは、価格帯の安い豚肉を中心に好調であったことから、73万トン（同3.7%増）となった（図13）。カナダ向けは24万3000トン（同1.5%増）となった。一方、日本向けは55万トン（同4.9%減）、韓国向けは18万4000トン（同17.7%減）といずれも減少した。なお、中国向けは前年の約2倍の22万5000トンとなった。

図13 豚肉の輸出相手国（2016年）



資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

2016年の1人当たり年間豚肉消費量（小売重量ベース）は、22.7キログラム（前年比0.4%増）となった。2015年以降、牛肉価格が高値で推移したことによる代替需要などにより、消費が増加している。

③ 肥育豚・豚肉の価格動向

ア 肥育豚価格

肥育豚価格は、2009年には世界的な景気の後退や新型インフルエンザなどによる内需・外需の減退から、100ポンド当たり41.2米ドルに下落した。2011年は、輸出需要の高まりなどにより、同66.1米ドルの過去最高値を記録し、その後も同60米ドル台の高値を維持した。2014年はPEDの影響などにより上昇したが、2015年は飼養頭数の増加などにより大幅に下落した。2016年は、引き続き肥育豚頭数が増加したことから、前年比8.0%安の同46.2米ドルとさらに下落した（表7）。

表7 肥育豚と豚肉の価格の推移

(単位:米ドル/100ポンド)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
肥育豚	61.1	64.0	76.0	50.2	46.2
豚肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	84.5	91.7	110.1	79.0	78.4
豚肉小売価格 (セント/ポンド)	346.7	364.4	402.0	385.3	374.7

資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook : Table」
注1：肥育豚価格は、全米の平均価格。

注2：カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

イ 豚肉価格

2016年の部分肉卸売価格(カットアウトバリュー)は、生産量の増加などにより100ポンド当たり78.4米ドル(前年比0.8%安)となった。

また、平均豚肉小売価格も同様に1ポンド当たり374.7セント(前年比2.8%安)と下落した。

(4) 養鶏・鶏肉産業

米国の養鶏産業は、飼料穀物の一大生産国という利点を生かし、生産から流通までの一貫したインテグレーションの進展により、極めて効率的な生産が行われている。また、国内では、消費者の健康志向からむね肉を中心として消費を大きく伸ばすと同時に、不需求部位のもも肉を中心に、鶏肉生産量の2割弱を輸出している。

① ブロイラーのふ化羽数の動向

2016年のブロイラーふ化羽数は、飼料穀物価格が安値で推移したことなどから、前年比1.6%増の94億7107万2000羽となった。

② 鶏肉の需給動向

ア 生産動向

2016年のブロイラー生産量(可食処理ベース)は、飼料価格の下落に伴い増羽が進んだことなどから、前年比1.6%増の1826万2000トンとなった(表8)。1羽当たり平均重量(生体ベース)は、骨なしむね肉の需要増に伴うブロイラーの大型化を背景に近年増加傾向にあり、2016年は2.80キログラム(同0.7%増)

となった。

表8 ブロイラー需給(可食処理ベース)の推移

(単位:千トン)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
生産量	16,621	16,976	17,306	17,971	18,262
輸入量	51	55	53	59	59
輸出量	3,299	3,332	3,310	2,867	3,014
在庫量	295	303	309	378	356
消費量	13,345	13,691	14,044	15,094	15,332
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	36.5	37.1	37.8	40.4	40.7

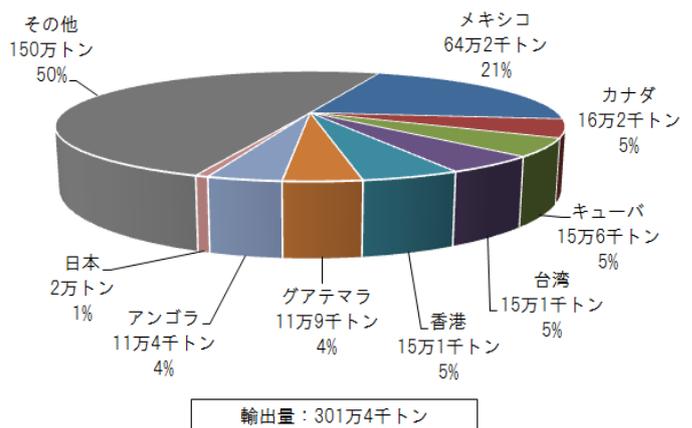
資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Outlook : Table」

注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出動向

2016年のブロイラーの輸出量(可食処理ベース)は、前年比5.1%増の301万4000トンとなった。鳥インフルエンザ発生に伴う輸出先国の禁輸措置などにより減少した前年からはやや増加したものの、2016年にも発生した鳥インフルエンザの影響や米ドル高などにより2014年比では8.9%の減少となった。輸出先上位3カ国を見ると、メキシコ向けは同3.9%減、カナダ向けは10.4%減となった一方、キューバ向けは同46.9%増となった(図14)。

図14 ブロイラーの輸出相手国(2016年)



資料：USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

2016年の1人当たり年間鶏肉消費量(小売重量ベース)は、牛肉および豚肉価格も前年から下落したものの、比較的安価な鶏肉の需要が増加したことなどから、前年比0.8%増の40.7キログラムとなった。

③ ブロイラーの価格動向

ア ブロイラーの生産者販売価格

2016年のブロイラーの生産者販売価格は、飼養羽数の増加などにより、前年比9.6%安の1ポンド当たり47.8セントとなった(表9)。

イ 鶏肉価格

(ア) 卸売価格

2016年のブロイラーの丸どり卸売価格(中抜き、12都市平均)は、前年比6.8%安の1ポンド当たり84.3セントとなった。なお、国内向けが主体となっているむね肉が1ポンド当たり116.6セント(前年比13.0%安)、輸出向けが主体のもも肉は同41.2セント(同4.9%高)とどちらも下落した。

(イ) 小売価格

ブロイラーの丸どり小売価格(中抜き)は、前年比1.7%安の1ポンド当たり146.4セントとなった。

表9 ブロイラー価格の推移

(単位:セント/ポンド)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
生産者販売価格(生体)	51.1	60.4	63.8	52.9	47.8
卸売価格(丸どり)	87.1	99.7	104.9	90.5	84.3
丸どり小売価格	142.2	149.6	153.3	148.8	146.4

資料: USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Table」

注: 卸売価格、丸どり(中抜き)の価格。

(5) 飼料穀物

米国は、世界最大の飼料穀物の生産・輸出国である。飼料穀物の主力であるトウモロコシは、世界の生産量および貿易量の約4割を占めていることから、世界の需給動向に与える影響力は極めて大きい。

① 穀物の生産動向

2016/17年度(9月~翌8月)のトウモロコシ(サイレージ用を除く)の生産量は、151億4800万ブッシェル(3億8500万トン^(注)) (前年度比11.4%減)と、収穫面積および単収の増加により前年度をかなり大きく上回った(表10)。同年度の期末在庫は、前年

度を大幅に上回る22億9300万ブッシェル(5800万トン)となった。

(注) 1ブッシェルを25.4キログラムとして換算。

表10 トウモロコシ需給の推移

(単位:百万トン)

区分/年度	12/13	13/14	14/15	15/16	16/17
生産量	273	351	361	345	385
国内消費量	263	293	302	299	314
うち飼料向け	109	127	134	130	139
輸出量	19	49	47	48	58
期末在庫量	21	31	44	44	58

資料: USDA「Feed Grain Database: Yearbook Tables」



写真5 トウモロコシの収穫風景

② 穀物の輸出動向

2016/17年度のトウモロコシの輸出量は、22億9400万ブッシェル(5800万トン)(前年度比20.8%増)と大幅に増加した。このうち、2014/15年度まで最大の輸出先国であった日本向けは、1356万トン(同29.9%増)となり、2015/16年度に引き続き2番目の輸出先であった。一方、メキシコ向けは1393万トン(同4.5%増)となり、2年連続で最大の輸出先となった。

③ 穀物の価格動向

2016/17年度のトウモロコシの生産者販売価格は、引き続き豊作であったことから、1ブッシェル当たり3.36米ドル(前年度比6.9%安)となった(表11)。

表11 トウモロコシ価格の推移

(単位:米ドル/ブッシェル)

区分/年度	12/13	13/14	14/15	15/16	16/17
生産者販売価格	6.89	4.46	3.70	3.61	3.36

資料: USDA「Feed Grain Database: Yearbook Tables」